

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 隠岐さや香

序

本論文は、1666年に設立したフランスの「王立科学アカデミー」の旧体制期における制度的特徴と会員らの科学的調査研究の諸活動を論じたものである。本論文は、3部14章からなる。第1章は王立科学アカデミー設立計画と設立の経緯、第2章はアカデミー会員ら科学者の社会的地位とその意義が論じられる。第3章では長年アカデミーの書記を務めたフォントネルらの言説に見られる「有用性」の概念が分析され、18世紀前半におけるアカデミー会員と産業技術との関わり論じられる（以上第1部）。第4章では18世紀中葉の7年戦争の敗戦などの政治的危機状況を経て、経済的関心に由来する諸問題がアカデミーでより多く検討されるようになったこと、第5章ではその一方で外部の社会からは一定の自律性を保証するような制度的条件が生み出されたことが論じられる。第6章では啓蒙主義の担い手とされる人々の科学観、特にダランベールとビュフォンの科学観が比較対照されて分析される。第7章では「有用性」の意味内容の変化とアカデミーの特に機械技術との関わり、第8章では18世紀後半の王国の宰相テュルゴーとアカデミーとの関わりが論じられる（以上第2部）。第9章では18世紀末における「エコノミー」という概念が分析され、第10章では科学アカデミー会員に諮問された監獄の環境改善の問題、第11章では気球などの科学技術上の諸問題、第12章では病院改革の問題、第13章では「政治算術」と呼ばれたコンドルセによって展開された経済社会現象への確率論の応用理論、そして第14章では人口論、運河建設などとその数学的扱いが論じられる（以上第3部）。

隠岐さや香氏の論文「十八世紀パリ王立科学アカデミーと「有用性」の追求—理想の学者像と道具的専門性の狭間で」は、17世紀後半から18世紀末までの王立科学アカデミーの活動の歴史を探究したものである。同氏は、本学の博士課程在学中にフランスに3年以上滞在し、その間当該テーマと関連する領域を研究するフランスの歴史学研究者とよく交流し、最新の知見を本論文に盛り込むことができた。またその間、パリ科学アカデミーのアーカイブならびにフランス国立公文書館において科学アカデミーの関連史料をじっくりと探索渉猟することができた。フランス革命前の旧体制期において科学アカデミーが活動した120年以上にわたる同アカデミーの議事録、会員の書簡等を丹念にあたることによって、公開された出版物・報告書だけでなく、その背後でなされていた論争、計画、計画をめぐる対立、王権から諮問を受けた諸問題などを明らかにすることに成功した。一次文献と二次文献の広範な調査の成果は、千以上を数える脚注によく反映されており、それが本論文の最大の強みになっている。

本論文の主要テーマは、17世紀の科学革命後期に創設された王立科学アカデミーが、同時代の社会においてどのような存在意義を有したか、有するべきであると論じられたか、そして諸科学の研究の有用性ということにアカデミーはどのような立場をとっていたかということである。単に基礎研究・応用研究という今日流通している二分法を当時の研究活動に無理に当てはめるのではなく、当時の議論に現れた「有用性」という概念の意味とその歴史的変化を分析し、専門家同士が切磋琢磨し質の高い研究が保証されるような研究機関としての自律性をもつようになっていったことを指摘し、そして18世紀後半においては王権の諮問機関としての性格を深めていったことを確認する。研究の根本的な性格を有用性

の概念、制度的な特徴と条件を通じて捉え直しているわけである。18世紀前半において、科学アカデミーの諸会員によって語られる「有用性」は、経済的利益に直結する実利的な有用性だけでなく、社会環境を整えたり、人間精神を向上させたりすることも含む広い意味で用いられていたが、世紀後半には好奇心を満たすための調査研究は有用性の範疇から除外されるようになっていった。それだけ経済的・政治的な関心が強められていくことになる。また科学アカデミーは機関誌の査読審査システムなどを早い時期に確立し、外部の干渉からはある程度独立した議論と発表の場が確保され、著者の呼ぶところの「科学の共和国」が成立していった。このように創設後の科学アカデミーは、広い意味での有用性を強く意識する一方で、科学研究の自律性を確保する「科学の共和国」を提供することが矛盾なく実現されていたことが指摘される。18世紀中葉以降になると科学の有用性に関して対立と論争がなされるとともに、王権の側でも王国の内外で生じる国家的な諸問題の諮問機関として科学アカデミーを活用しようとする動きが進み、王国の統治のための科学を調査研究する機関としての性格を有していくようになる。

隠岐氏の論文は、このような科学アカデミーの制度的環境の120余年を通じての変遷を跡づけることを縦軸としつつ、本論14章の各章において科学アカデミーが取り組んだ各時代の重要な科学技術上の問題、社会的問題とその取り組みの経緯が横軸を構成する歴史的トピックとして解説され分析されている。そのそれぞれの歴史トピックが重要な歴史的、社会的、科学的意義を有しており、論文内容が大変興味深いものに仕上がっている。その一例をあげれば、当時においては、監獄と病院の居住環境の改善は喫緊の課題とされるようになっていたが、論文ではその課題へのアカデミー会員の関わり、調査の過程で建造物の具体的な建築設計までには関わらないようになったプロセスが詳細に記されている。そのプロセスの記述にあたっては、化学者と医学者が交流することになるような空気的良好度に関するテクニカルな内容に十分に踏み込んで論じるまでには至っていないが、当時の先端的な科学研究と社会的に重要な問題との関係とそれをめぐる議論の進行過程を詳細に描き出したことは高く評価される。また、それ以外にも、コンドルセがかかわった「位置の解析学」「政治算術」と呼ばれる数学的理論化の試みなどの論述も大変興味深いものである。

審査は、科学史・医学史・科学哲学を専門とする教員とともに、この時期のフランスの社会史、経済思想史を専門とする研究者によってなされたが、いずれも本論文に対しては史料調査の綿密さと内容の重要性と興味深さから博士研究論文として高い評価がなされた。

結び

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。